393
504

大慈寺
開山寒巖法皇禪師傳

始

大慈寺
開山

寒巖法皇禪師傳

附 大慈寺、如來寺、極樂寺小沿革

目次

一、緒言……一
二、發心出家……一
三、承陽大師に相見……二
四、入宋求法……三
五、如來寺及樂樂寺……五
六、大慈寺の建立……六
七、開墾の偉業……七
八、大慈橋の架設……九
九、多寶塔……一一
十、禪師の入寂……一三
附錄
大慈寺小沿革……一五
如來寺小沿革……一六
樂樂寺小沿革……一六
大慈寺境内建物並塔廟一覽……一六

393-504

大慈寺開山 寒巖法皇禪師傳

山田孝道著

一、緒言

熊本縣飽託郡日吉村曹洞宗大梁山勅賜大慈禪寺は、人王八十五代後鳥羽帝の皇子寒巖禪師開創の道場であり、また八十九代龜山法皇勅願の靈蹟にて、その法系の寺院も全國に數百ケ寺もあり、德川氏の中頃までは獨立本山として永平寺、總持寺に並ぶ程の格式があり、九州唯一の禪林であつたのである。今謹んで禪師御一代の事歴を記し、その高德偉業を世に紹介して、現今思想界の暗黑を照らすの光明幢となさうと思ふ。

宮正相2
12.4.
内交

二、發心出家

寒巖禪師は諱を義尹といひ、御父は後鳥羽帝で、御母は修明門院と申して、左大臣

藤原範秀公の御息女である。御誕生は建保五年であつて、恰も北條義時が政權を恣にし、横暴を極めて居つた時である。されば禪師五歳の御時、かの忌まはしき承久の戰となり、御父後鳥羽院は隱岐に、御兄、土御門院は土佐に、御弟順德院は佐渡に、御父子三皇各々天涯數百里の窮地に蒙塵せられ給ふたと云ふ、實に我が國有史以來曾て無い所の悲慘なる一大事變が起つたのである。面のあたりこの慘逆に逢ひ給へる御父子三皇のお歎きは、實に申し上ぐるも恐れ多いことであるが、まだ御幼少の禪師にも、痛く北條の横暴を惡ませらるゝと同時に、御父子別離の涙は、御胸一杯に溢れてゐたことゝ思ひます。是れがやがて御出家の動機となり、誓て佛道を成就し佛心を體得して、濁れる人生を廓清し、皇室を擁護し、國體を尊嚴にして、御父兄等の御恩に報ひたいと云ふ一片耿々たる菩提心が、むら〳〵と燃え出でたものと察せられます。

三、承陽大師に相見

御年十六歳の時、比叡山に上りて御剃髮になり、專ら天台の敎相を學ばれました。固より御聰明のことゝて、山籠凡そ十年間に、殆ど天台學の全部を究められたが單に學問や講釋の佛敎では、佛陀の眞精神を體驗することの不可能なるを悟られ、仁治二年廿五歳の時、比叡山を下られた。丁度その頃、我が曹洞宗の開祖承陽大師が、支那から歸朝せられて宇治の興聖寺にゐられて、盛に釋尊正傳の佛法を唱ひられてをることをお聞きになり、直に大師に參見せられたのである。もと承陽大師の御姉君は、承明門院と申し上げて後鳥羽院の皇妃であり、而して土御門院の御母君になるゆへ、後鳥羽院は大師の爲には義理の兄君に當り、又大師と禪師とは義理の叔父甥の關係になるのである。かゝる深い事情によりて、我が皇室と宗門との密接なる關係あることをも察せらる。

四、入宋求法

建長五年、禪師卅七歳の春、入宋求法の大願を發し、大師の許を辭して、一笠一杖

遠く萬里の波濤を越へて大宋國に入り、而して名山大川を跋渉し、諸方の善知識に參見して、大に御修行を積ませられたのである。大慈寺に秘藏せる禪師眞筆の『寶塔幹緣』の文の中にある、

義尹(禪師の諱)曾て法を求めて宋國に入り、錫を天台雁山の雲に馳せ、衣を平江洞庭の水に浸し、育王山に上りては如來の佛舍利を禮拜すること八萬千有餘拜石橋山に詣でゝは、五百の大羅漢に茶藥を供養して、佛陀の慈悲力を仰ぎ、羅漢の加護を念じたりき云々。(原漢文の取意)

の御文に徵しても、禪師の熱誠を拜察することが出來るのである。その後一旦御歸朝になつたが、承陽大師は既に御遷化になり、二代孤雲禪師が永平寺を繼がせられてあつたので、師に就て菩薩戒を受け、又た徹通禪師に隨つて參問せられ、遂にその法を嗣がせられた、斯くて禪師は承陽大師の道を宣傳するには、先づ大師の法身舍利とも申すべき一代の法語を蒐めて之を卷帙となし、而して廣く天下に流通するこそ大師に報ゆる唯一の行持なりと思召され、龜山帝の文永元年、禪師四十八歳の時、大師の法語を携へて再び入宋せられたのである。先づ瑞巖の無外を訪ふて、大師の語錄を示された、無外一誦して深くその高風に感じ、直に序と跋とを草して呈した。次に靈隱の退耕、淨慈の虛堂等を叩ひて、各々跋文を受けられ、名山靈跡、徧く探り盡して文永四年禪師五十一歳の時に御歸朝せられたのである。その後、約三年間、博多の聖福寺に留錫せられて、窃に聖胎を長養せられ、弘法の時機を待つてゐられた。

五、如來寺及び極樂寺

偶々肥後小保里越前守の母素妙尼、深く禪師の德を慕ひ、宇土の鄕に一寺を建立し禪師を請して始祖と仰いだ。是れが即ち今の如來寺である。さて此の近鄕に安德帝の御陵と云ふのがお祀りしてあつて、この帝は後鳥羽帝の皇兄にして、禪師の伯父に當るのである。然るに壽永の昔し、畏くも壇の浦の波路に漂ひ給ひ、遂に此の地に落ちのびて崩御せられたと云ふ悲哀の歷史が、今猶この鄕の口碑に傳はつてゐる。ソコ

デ禪師がこの如來寺に住せられたのは、無論衆生敎化が目的ではあるが、一面にはこの帝の追福を修する爲めであつたと察せらるゝ。現に今御陵の傍に『拜石』と稱する。平たい石があつて、禪師は旬朝必ず如來寺より此處に詣でゝ、この石の上にて御拜をせられたと云ひ傳へて居る。滿腔の至情を披瀝して、崇敬を捧げらるゝこの御態度には、何人も眞に感激を禁じ得ないのである。更に又禪師は、お年六十歳の時、悲母修明門院追福菩提の爲めに特に一宇を釋迦堂村に建立せられた。即ち今の極樂寺である。門院は後鳥羽帝と永別せられて後、獨り都の空に留まりて淋しき月日を送り、果敢なく終り給ひしことが、常に禪師のお胸に往來して斷腸の想ひ禁じ難きものがあつたであろうと思ふ。遂に此の寺を建てゝ尊靈を祀り、以て父母劬勞の德に報いられたるは、實に孝順の至りといふべきである。

六、大慈寺の建立

さて其頃川尻の城主に川尻泰明と稱して、由緒ある名將がありましたが、深く禪師

の德に歸依し、その領內の土地四町四方の境內を寄進し、七堂伽藍を建立して、禪師を開山となし、熱心に參禪聞法をしたのである。禪師初めて請をうけて飄然としてこの地に來て見れば、綠水の洋々として流るゝ、老樹の鬱々として茂れる、四域の閑雅幽邃なる、自から塵外の別乾坤であつて、曾て在宋の當時、明州の大慈山に遊びて、その清絕奇絕なる景勝が今に忘れ難いのであるが、此の地さながら支那の大慈山に似てゐると仰せられて、遂に名を命じて大慈寺と稱せられたと云ふことである。實に弘安元年禪師六十二歳の時である。是より專ら大慈寺を根本道場として、甘露の妙法を說いて盛に道俗を敎化せられたのである。

七、開墾の偉業

特に禪師の偉業として傳ふべきは、川尻、大渡、錢塘一帶の田面を開拓せられたる一事である。始めこの地方は、不毛の荒野多く、又水利の便惡しくして、農民耕作に苦しんで居た。禪師はこの窮狀を見て、深く同情を寄せられ、誓て之を救はむとの大

願を發して、土地の開墾と、治水事業とに全力を注がれたのである。日々自ら率先して簑笠を着け、草鞋を穿つて農民を指揮し、土一荷を運ぶものには、錢一文を給すると云ふ制を設けて、大いに開墾を奬勵せられ、十數年間の苦心を以て、遂に千町歩餘の田面を拓き、數里に亘る堤防を築き、幾百の溝渠を作りて、耕作の便益を與へられたのである。その赫々たる偉績は、六百年の今日、猶歴々として事實の上に顯はれてをるのである。彼の錢塘の名の如きも、一説には禪師が支那の錢塘に擬して命名せられたと云ひ、或は又土一荷毎に錢一文づゝを與へて造りし塘と云ふ意味なりとも傳へてをるが、何れにしても禪師の命名なることは疑ひないことである。又この錢塘村に鎮座せる氏神を歳星宮と稱して、後鳥羽院修明門院の兩尊像を祀つてありますが、是れ亦禪師の兩尊追孝の深い思召しで、里人は今猶年々十二月の丑の日に崇嚴なる大祭を行ひて、禪師の高恩を感謝し、祭典の行列儀式、神前の供膳獻立等まで昔ながらに變らず、婦女兒童までも寒巖法皇の御名を知らないものはないと云ふ程である。

八、大慈橋の架設

更に禪師の大慈悲心の發露として特筆すべきは、大慈橋の架設である。今大慈寶庫に秘藏せる禪師眞筆の橋供養の願文によれば、

肥後の國大渡は、九州第一の難處である。その源は阿蘇の神池より流れ來り、白河と綠河との二水が合して一となり、頗る急流激浪にして、その渡船の處には、貴賤襲來し、兩岸喧諍し、人馬競うて扁舟に乘らうとして、過つて身命を失ふものが甚だ多い。義尹（開祖の諱）之を見て憐愍に堪へない、畢竟是れ昔より橋梁がないからである。是非一つ橋を架けて人を救ひたい。佛陀も未だ度らざるものは度らしめよと仰せらる。聖天子は常に人民を愛撫して危き處は安穩にせしめらる。佛陀は衆生を愍みて苦を拔き樂を與へ給ふ。望むらくは文武百官の人々、心を同うして砂石を運んで急流を塞いで下されよ。緇素四輩の方々、力を合せて金銀を聚めて、長橋を架けて下されよ。經にも、若し園林を種へ井を造り、橋梁を架けるは功德甚廣

にして福畫夜に增長すとある。橋が成就すれば、肥後一國の福業のみならず、實に國家の德政である。昔し行基僧正も山崎の橋を構へられた。今野衲もたとひ德は薄くとも、川尻の橋を架くることの出來ない筈はない。若し橋が成就すれば、清水映徹して月光童子の影を湛へ、靈木不朽にして地藏菩薩の德を現じ、南北より來る人畜も、東西より赴く賢愚も、齊しく彼岸の佛土に到るのである云々（原漢文の取意）

とあるが、實に一言一句が同情慈愛の結晶であり、又熱烈なる信仰の表現である。何と云ふ崇高なる御人格であろうか。扨禪師は建治二年丙子五月にこの願文を草して十方に淨財を募られ、自ら工事を監督して、苦心焦慮、遂に一大橋梁の架設を竣工して、弘安元年戊寅七月晦日に橋供養の法會を行はれた。序に橋供養の文の一部を左に寫しませう。

大渡橋供養記

一　奉レ懸二渡大橋梁一條一　長百尋餘　廣一丈六尺

一　兼三三箇日一不レ斷二御讀經幷三時法華懺法一經者所謂

華嚴經八十卷　大集經三十卷

大品般若經三十卷　大般若經六百卷

法華經八卷　涅槃經四十二卷

一　當日奉レ屈二請一千口僧侶一

以上の如く、橋供養の時に千人の僧侶衆を招いて盛なる大法會を行はれ、併せて溺死者の追吊會を修して顯幽二界を平等に利益せられたことが願文の上に記されてあるが、如何にも廣大な佛行であり、社會奉仕の體現者と申すべきである。當寺の山號を大梁山と名づくるも、全くこの大慈橋に因みて命名せられたものである。

九、多　寶　塔

次に今一つ禪師の信仰の溢れたる德行は多寶塔の建立である。正應二年五月十六日禪師の眞筆になる寶塔幹緣の文の中に

（上略）夫れ釋迦如來は我等を度せんが爲に世に出でゝ妙法を說かれ、多寶佛は我等を愍むに依て、空に昇つて證明せらる、今一基の塔を建てゝ二佛の華座を莊嚴するは、實に無限の大功德である。望むらくは淸信の檀那、雅操の善人よ、佛弟子の衲等が兩手を展べて喜捨を乞ふときには、縱ひ一塵芥でもよいから早く手の中に投げ入れて呉れよ。又鐵鉢を持して門に立つときには、縱ひ一滴の水にてもよいから、早く鉢の中を霑して呉れよ。一塵も積れば高き寶山となり、一滴も集れば深き願海となるぞ。曾て願を發して長橋を二町有餘の水面に懸け、一千人の僧伽を供養したが、今八旬の壽に向ひ、最後に多寶の塔を建てゝ我が願望を成就し、一天の泰平を祈るなり云々。（原漢文の取意）

とある。言々句々、信念の凝結、菩提心の披瀝で、その玲瓏玉の如き敬虔眞摯の御人格が、宛然として眼の前に拜せらるゝ心地がするのである。其の他梵鐘の鑄造、佛像の彫刻、畫像の眞蹟等、今猶儼然として寺中に存し、禪師の德行を瞻仰することの

出來るのは、お互難遇の勝緣であります。

十、禪師の入寂

桃李言はずして其下自ら蹊を成す、禪師の道聲は、遠き九重の雲の上までも聞えし、永く勅願の道場とせられた。是れにより四方禪師の德を崇め、その諱をいはず法皇長老と稱した。大慈寺に住せらるゝこと凡そ二十有餘年、利生報恩の行持、一日も間斷なかりしが、正安二年八月廿一日に至りて微恙を示された。靜に齋戒沐浴して佛陀の遺範により大衆弟子等の爲に八大人覺を說き、泊然として涅槃定裡に入られた御年實に八十四歲である。遺偈に云く、

八十四年。動靜得レ禪。末後一句。威音以前。

禪師世を去られて既に六百有餘年、大慈寺の御廟、老樹鬱蒼たるの下、禪師の舍利塔、嚴として聳へ、靜に跪いて禮拜すれば、髣髴として神在すが如く、一道の靈光人の心を射るものがある。

また法堂に奉安せる御木像は、禪師御自作の御像であるが、如何にも大慈悲の溢れたお姿で、御一生の事蹟を懷ひ浮べて瞻仰すれば、無限の感謝に打たれて、忝げなさに涙こぼるゝの感があるのである。

禪師のお弟子に四人の英傑ありて、その名を斯道紹由、鐵山士安、愚谷常賢、仁叟淨熙と申します。各々一方の善知識で、法門を擧揚せられたが、斯道は中年にして早く終られ、その法統が傳はらなんだ。鐵山の法孫が遠州普濟寺の系統となりて、廣く關東中國に瀰漫し、仁叟の法孫が即ち大慈寺系にして、專ら鎭西に傳はり、東西相呼應して禪師の道が今日に弘まつたのである。愚谷は鷲林寺の開山であるが、古記によれば、愚谷は順德院の皇子であつて、法皇禪師とは肉緣の叔父、甥の關係であると云ふことである。

禪師の滅後、後奈良院、正親町院、後陽成院等の帝が、皆禪師のお德を追慕し、御綸旨幷に御宸翰等を賜はり、今も大慈寺の寶庫に秘藏してある。實に師の允道德の力慈悲の光りは、天地に輝き、衆人の心を照らして、永久に滅せずといふべきである。

（おはり）

附錄

大慈寺小沿革

大慈寺は開祖の滅後凡そ二百四十年、星移り物換り、永正十七年には國內に兵亂が起り、大火蔓延して類燒の難に逢ひ、大慈寺の崇嚴なる七堂伽藍は全部烏有に歸した依て享祿二年四月に、五十一世洞春和尙が、時の帝後奈良院に奏請して、再建の勅許を得、大に勇猛精進して、殿堂僧舍を再建せられ、當山の中興となられた。然るに其の後、天文の頃と明和年間と、二回火災に逢ひ、殿堂大半燒失したと云ふことである七十八世大梅和尙は學德兼備の名師なりしゆへ、幕府幷に朝廷に數々出願して允許を蒙り、十方の淨財を聚めて、非常なる苦心と努力との下に、遂に伽藍を復興せられたので、是れが當山の再中興である。當山はもと川尻泰明より寄捨せられし五十五町の田地あり、又加藤、細川より代々外護を受け、毎年八十俵の御茶湯料を寄贈せられたと云ふことである。然るに明治維新の際排佛論盛に起り、信根頓に衰へたので僧堂衆寮等凡そ十八棟を毀されたが、八十九世象外和尙の時、方丈、書院、庫裏、齋堂鐘

樓門を建立して、衰廢を興された。只今の佛殿法堂は大梅和尚の再建であつて約二百年前の建築である。

如來寺小沿革

如來寺は唯今宇土驛の邊、老松綠り深き小丘の上にありて、瀟洒なる一草庵であります。今日まで春風秋雨、凡そ六百有餘年、幾多の變遷を經來りて、伽藍は甚だ矮小であるが開祖御自作の釋尊像、及び御自身の眞像は、儼然として毫光を放ち、慈眼溫容、覺えず敬虔の念を催さしむるのである。代々住持人ありて丁寧に御供養が出來てをる。

極樂寺小沿革

極樂寺は綠川の對岸釋迦堂村にありて、大慈寺を去ること僅に十町に足らない程である。維新の際廢寺になつて、唯今は住僧なく、僅に頽れたる一草堂と一古碑とが、空しく荊棘の中に沒して、限りなき懷古の情に禁へぬのである。もとこの境內に、開祖の御兩尊、後鳥羽、修明門兩院の塔基がお祀りしてありしを、大慈寺の大梅和尚が、寶永年間に大慈寺境內に移され、唯今寒巖塔の後に嚴かに奉安してあります。

大正十二年四月十日印刷
大正十二年四月十五日發行

（正價金拾五錢）

熊本縣飽託郡日吉村大慈寺住職
東京市牛込區原町貳丁目六拾貳番地
著作兼發行人　山田孝道

東京市芝區三田小山町三番地
印刷所　伊藤印刷所

不許複製

大慈寺境内建物並塔廟一覽

一境内　約方二町（從前八方四町ナリシト云フ）

一山門　間口二間半　奥行三間

一通用門　間口四間半　奥行二間

一經藏　間口三間半　奥行三間

一佛殿　間口七間　奥行八間

一法堂　間口十四間　奥行十間半

一書院　間口四間半　奥行五間

一大廣間　間口五間　奥行十一間半

一方丈　間口六間　奥行六間半

一庫裡　間口十二間　奥行八間

一浴室　間口五間　奥行二間

一倉庫　間口二間半　奥行六間半

一雪隱　間口二間　奥行二間半

一御陵境垣　縱五間　横四間

一寒巖塔　高サ七尺

一後羽院塔　高サ六尺

一修明門院塔　高サ六尺

一多鳥塔（開祖創建）　高サ一丈二尺

一石像藥師如來　高サ一丈三尺

一開祖作釋尊像　高サ一丈六尺

一脇立迦葉阿難兩尊像　高サ九尺

一御自作寒巖皇法像　高サ四尺五寸

193
704

終